

ステークホルダー・ミーティング

ステークホルダーとの対話を通じて社会の声に耳を傾け、事業活動に反映させることを目的に、2008年6月、3回目となるステークホルダー・ミーティングを開催しました。当日は、本社ビル内にプレオープン中の史料館「mandom world」を見学していただき、会社案内ビデオを視聴いただいた後、ミーティングに移りました。いただいたご意見をダイジェストで紹介します。

| マンダムの環境活動について |

◆環境活動に取り組むにあたり、「マンダムとしてこう考え、環境保全に向けてこのように取り組んでいく」という理念を打ち出すべきだ。長期的にどう取り組むのか、作った製品の質をどんな観点で評価するのか、原材料やエネルギーをどう使っていくのか—あらゆる領域で自社の考えをきちんと明示し、方向性を示すことが重要。(植田氏)

◆5年後、10年後の計画を立てる際に、世界や国、社会が描く長期的な未来像や目標も参考に、例えば、「2050年にその目標とする世界に向かうためには、5年後には何をしなければならないのか」と、先を見据えて考えることも重要だと思う。(八陣氏)

◆環境問題を考える際には、「声を出さないステークホルダー」にも目を向けることが望まれる。クジラにもカメにも投票権があり、すべての生命体をステークホルダーと考えると、製品づくりのあり方も変わってくるかもしれない。もちろん、理想と現実にはギャップがあるのは当然だが、毎年の活動を評価し、自社の活動が良い方向に向かっているのかを評価することが重要。(植田氏)

◆3Rも大事だが、「リサイクルをすればいい」というものではなく、まず「減らせるものを減らす(リデュース)」「有効な再利用(リユース)」という2R主義もある。「リサイクル量自体の減量方法はないか」など、一歩先を読む環境視点の議論をぜひ。(水谷氏)

| 社内外のコミュニケーション |

◆社内にCSRを浸透させるためには、これに取り組んでさえいればよいといった絶対的な方法はなく、社内でのコミュニケーションを促進するなど、地道な活動の継続に尽きる。(八陣氏)

◆企業はファンを作らないといけない。商品にはもちろんファンがいるはずだが、企業自体にもファンが必要。「マンダムは良いことをしているので、マンダムだったら応援したい」と言ってくれる人を増やしていくため、もっと社会と対話されるとよいのでは。(植田氏)



京都大学大学院
経済学研究科 教授
植田 和弘氏



社会福祉法人
大阪ボランティア協会 事務局長
水谷 綾氏



松下電工株式会社
CSR・社会貢献室 技師
八陣 知広氏



Stakeholder Meeting

社会貢献活動

◆環境活動だけでなく、社会貢献活動にも理念が必要。地域やテーマの重点の置き方など、さまざまな考え方がありますが、「マンダムの社会貢献はこういう社会づくりに寄与したい」という思いをもう少し明確に打ち出されてはどうか。
(水谷氏)

マンダムに期待すること

◆将来が不確実な中、これから求められるのは、情報収集能力、学習能力、コミュニケーション能力だ。「今後どうなるのか」について自社なりの見解を持つため、情報収集は不可欠だし、理解を明確にするためにベストプラクティスを勉強することも求められる。(植田氏)

◆総合的な話も大事だが、今後はテーマを絞ったダイアログの開催も検討されてはどうか。これから自社で取り組もうとしていることを^{せじょう}狙上に載せ、「皆様はどう思われますか？」と課題を提示すれば、焦点を絞ったダイアログを開催することができる。(八陣氏)

◆若者が直接手に取り身体につける製品を作っているという強みは、マンダムには若者の生活行動を変える潜在的なチャンスがある。製品を通じてメッセージを発信し「エコっぽいおしゃれ」に共感する若者が増えれば、本業を通じたCSRではないか。(水谷氏)



マンダム参加者の意見

◆「声なきステークホルダー」は、声を出さないが故に普段なかなか意識する機会がないのですが、植田先生のお話を伺い、今後は声を出さないステークホルダーに対してどう接していくかを考えたい。(齊藤)

◆環境活動は、社会的な評価軸がまだまだあいまいで難しいのですが、ダイアログに参加したことで、軸を明確化し、その評価を社外の方にいただくことで、いろいろなことが見えてくるということが理解できました。今後、社内で検討しさらに前進していきたいと思います。(隈元)



取締役 常務執行役員
リソース管理統括
齊藤 嘉昭

第二商品開発部 次長
隈元 義春

ロジスティクス部
資材課 課長
豊永 雅士

総務部 次長
木村 三千雄

ヒューマンリソース・
マネジメント部 課長
大橋 功

福岡工場
環境管理課 課長
内田 典克

中央研究所
品質評価室 室長
秋山 伸二

注：所属組織名、肩書きなどはミーティング開催時点のもの

ステークホルダー・
ミーティング

Stakeholder Meeting



◆植田先生から「企業が決定し活動している方向が、正しい方向に進んでいるのか自ら確認することが重要」とのお話をいただき、会社が良い方向に決定できるための良い上申（活動の提案・計画、効果・目標等）ができていくかを見直して、取り組んでいきたいと思えます。（豊永）

◆企業にはコスト的なこともあり、単純に「環境配慮のみを考えて取り組みます」とは言えない部分もあるのですが、全体的に見てマンダムが最も良い方向に向かえるよう、「全体最適」を考えながら取り組んでいきたいと思えます。（木村）

◆現在、開示している社員数や男女構成比のデータでは、企業の雇用の実態がわからないというご意見を聞き、考えさせられました。どのようにすればわかりやすくなるかを考えていきます。（大橋）

◆福崎工場では、40～50代の女性の方がたくさん活躍しています。工場には、「班長」という役職があり、そういった女性たちもラインや現場でメインの業務を担当しています。今後は、環境活動にも女性の声をどんどん取り入れたいと思えます。（内田）

◆私が入社した頃は、女性は社内結婚すると退職していましたが、ここ最近では育児休業や育児勤務制度を有効活用するなど、変わってきています。最近は女性化粧品に力を入れていることもあり、男性の視点だけでなく、女性の感覚や意見を含めたモノづくりができていくのは、とても良いことだと思えます。（秋山）

いただいたご意見を受けて

昨年に引き続き、今年も本社に来ていただいて、3回目となるステークホルダー・ミーティングを実施しました。当社は、昨年12月に創立80周年を迎え、それを記念して設置された史料館を見学していただき、その後貴重なご意見を頂戴しました。

環境に関する中長期的な取り組みの必要性や社内コミュニケーションの促進、商品を通じた若者へのメッセージの発信などのご意見をいただき、当社に期待する皆様の熱い想いを感じました。また、ステークホルダーと向かい合うことの大切さも教えられました。昨年いただいた「アジアでの多文化共生」について、当社では3月にマレーシア出身の取締役を現地企業の社長に登用いたしました。また、学生向けの「CMコンテスト」も継続して実施しています。

今後は、いただいたご意見を真摯に受け止め、創立100周年に向けて、環境・CSRへの取り組みをさらに強化していくように心掛けていきたいと思っております。

環境推進室 室長
今川 正裕



その他の参加者 環境推進室 課長 牧 博英 / 係長 川西 史朗

社員ダイアログを実施

企業理念を改定したことに伴い、2008年5月から「ステークホルダーへのお役立ちとは？」をテーマに社員ダイアログを始めました。

第1回目は社外から講師を迎え、「今後、社会からどういった要請が出てくるか」「マンダムに求められることは？」といったお話を聞いた後、メンバー間で自分自身の仕事にそれらの問題を置いて考え、活発な議論を展開しました。今後も継続的な対話の場を設け、マンダムのDNAである「お役立ち」について社員一人ひとりが自分の言葉で語れるようにしていきたいと考えています。



レクチャー風景

製品を通じたお役立ち

マンダムグループでは、常に「製品を通じたお役立ち」を念頭に研究開発を行っています。製品がかかわるすべてのシーンにおいて環境保全の取り組みを進めるとともに、お客様のベネフィット向上につながる研究開発も積極的に推進しています。

